

清経入水

——『平家物語』作者に見えなかったもの——

宮 田 尚

1

寿永二年（1183）九月の月の夜、小松大臣の三男清経は、豊前国柳が浦に舟を浮かべてしばし朗詠を楽しんだ後、閑かに経を読み、念仏を唱えて海に身を投じたという。

この二か月間、平家をめぐる環境は激変し、一門に列なる人々は不安と恐怖の日々であった。

七月下旬、木曾義仲に追われて平家は都を捨てた。安徳天皇を擁してはるばるたどり着いた太宰府も、安住の地ではなかった。協力を期待した緒方維義に追われて退散を余儀なくされる始末。緊急避難した山鹿から、さらに柳が浦まで逃げ延びたものの、こゝも安穩ではない。敵の襲撃に怯える日々が続く。清経の入水は、そのひとつの結末であった。

覚一本『平家物語』によれば清経は、「網にかかれる魚のごとし。いづくへゆかばのがるべきかは。ながらへはつべき身にもあ

らず」と、平家一門と自らの置かれた状況を認識していたという。行方定めぬ一門の将来に絶望して、清経は入水したというのだ。

たしかに、八方塞がりだ。権力をほしいままにしてきた都での豪華な生活から、一転して不如意な放浪生活へ。しかも、行き先をあてさえ失ってしまって、現在よりもより、将来にも光明は見出せない。二十歳を出たばかりの青年清経が、閉塞感にうちひしがれ、絶望したとしても不思議はない。

2

それは、わかる。わかるけれども、覚一本『平家物語』のこの説明は腑に落ちない。

権力を失った平家一門の、なすすべもない無惨な周章狼狽ぶりを前面に出し、それを入水に結びつけて説明するとき、入水は〈私〉を越えて、〈公〉の性格を帯びる。清経個人の問題ではな

く、組織としての悲劇性を強調することになるのだ。覚一本のねらいは、まさしくこの効果にあったとみられる。

だが、一門の絶望的な命運と清經の入水とを結びつけることは、いささか無理筋ではないか。清經の置かれた状況からすると、実態からかけ離れすぎているように思われる。

その点にふれる前に、なぜ清經が他に先立って自死したのか、覚一本はそれをどう説明しているかを確認しておきたい。

覚一本によれば清經は、「もとより何事も思ひ入れたる人」だったという。人一倍物事を悲観的にとらえ、思い詰める傾向が彼にはあり、その氣質が、他に先駆けた自死の道を選ばせたというのだ。

京都を追われ、太宰府を追われ——、とりわけ太宰府を追われてからは、いつ敵に襲われるかわからない切迫した恐怖にさいなまれる日々だったろう。受け止め方に個人差はあるにしても、それはすべての人に共通する思いだったに違いない。

その苦しさに、人々は堪えた。だが、清經は堪え切れなかった。この差異には、とうぜん説明が必要になる。そこで覚一本は、清經に固有の事情として、彼の人となりを指摘したのだ。

清經の性格に関する覚一本の説明は、根拠のないものではなかった。たしかに、彼には物事を思い詰める傾向があったらしい。「思ひとる方につよかりける」との評が、『建礼門院右京大夫集』にも見える。清經を直接知っている人物の証言だ。これは留

意しなければならぬ。

一門の人々が、恐怖や不安におびえながらも堪えているとき、清經だけが入水した理由については、これで一応の説明がついたかにみえる。

3

しかし、問題は清經の立場だ。平家一門の中であって清經は、いわば「その他大勢組」にすぎない。一門の命運を左右する責任ある立場にあるわけではないし、現在の苦境をもたらした原因者として責任を負わなければならない立場にもない。その清經が、一門の先行きの不透明さを一人で背負い込んだかたちで、なぜ入水しなければならなかったのか。たとえ彼が思い詰める性質だったとしても、それだけではとうてい説明しつくせるものではない。

当時、一門の意思決定権は、宗盛を中心とする時子腹の面々に握られていた。かつて主流であった小松家は、重盛の死によって勢力を失い、傍流に転じた。

それでもまだ、清盛の存命中には清盛の庇護もあった。たとえば、頼朝軍を制圧するために富士川まで遠征した平家軍の大將軍に、経験の乏しい維盛が任じられたのは、そのよい例だ。嫡流としての小松家を盛り立てよう、維盛に軍功を立てさせて、一門の中での立場を強化させようとの思いが清盛にあったことを、これ

は示している。

その清盛も、やがて没した。もはや憚るべきものはなにもない。時子腹の側はそれまでの鬱憤を晴らすかのようになり、一門を支配した。とりわけ都落ちの後は、一門は完全に時子腹の側に牛耳られていて、小松家の発言権はないに等しかったとみてよい。

平家内部の勢力地図が塗り替えられ、時子腹絶対優位の体制が形成されたのは、重盛の死や時子腹の側の思惑だけにあるのではない。むしろ、その原因を作り、助長したのは小松家の側だ。もう少し具体的にいうと、二度にわたる維盛の失敗だ。

維盛は右に述べたように、頼朝軍制圧のために富士川まで遠征した。だが、あっけなく敗走した。清盛の庇護は裏目に出てしまった。源平の全面戦争の初戦でのつまづきは、その後の軍事情勢に大きく響いた。三年後、名誉回復の機会を得て遠征した北陸の戦いでも、維盛は義仲軍に大敗した。この結果、平家は都落ちを余儀なくされた。

都落ちの原因をすべて維盛に押しつけることは出来ないけれども、おおきな要因であることは否定できない。維盛にも、それはわかっている。だから彼は、一門からの責めを受けることを覚悟のうえで都落ちに同行した。しかし、妻や子を巻き添えにするのは忍びない。そう考えた維盛は、妻子を都に残した。

都落ちしてからの維盛に、身の置き所はなかっただろう。彼は有形無形の圧力に堪えることで、主流をなす時子腹の面々への恭

順の姿勢を示すはかなかっただろう。かつては主流であっただけに屈辱的だが、やむをえない。ちなみに、都落ち後の維盛は、『平家物語』では、都に残して来た妻子に思いを馳せる、煩惱に悩む人物として描かれている。

総領である維盛がこのような状態だったとすれば、小松家のまとめ役を果たすことなど、とうていできない。弟の清経が絶望感にさいなまれていたとしても、自らのことにかまけて気が付かなかっただろうし、仮に気付いたとしても、救済の手をさしのべる余裕などなかっただろう。小松家は、一門の中の弱者としてまともな、助けあたり慰めあたりすべき状況にありながら、寄り添うどころか、実際にはばらばらになっていたのではないか。

清経は、冒頭でふれたように小松家の三男である。小松家の中でも、リーダーシップをとる立場にはない。その清経が、一門の先行きに絶望して入水するのは、いかに思い詰める気質だったとしても不自然だ。覚一本の説明は、合点がいかない。

4

大上段に振りかざして、おごれる平家の犠牲者としての、いわば〈公〉の面を強調する覚一本とは対照的に、延慶本はまったくの個人的な事情による〈私〉の入水だとしている。すなわち、直接のきっかけは、妻の心変わりだというのだ。これはわかりやすい。清経は都落ちに際して、妻の許に形見として髪を残してきた。

ところが妻は、清経が都を出てからなんの音信もないのを恨み、一首の歌を添えて、その髪を送り返した。

都を追われ、さらに太宰府までも追われて苦境に陥っている最中に、あるうことか、心のよりどころであった妻からも、追い打ちをかけるような愛想尽かしの手紙が届いたとなると、緊張の糸が切れもしよう。

これはあくまでも、清経だけの特殊事情だ。こうした事情があったのなら、一門の中で彼が他に先駆けて入水したのも、無理からぬことだと了解される。

しかし、ここにも問題がある。妻の心変わりが、いかにも早すぎるのだ。繰り返すことになるけれども、清経が入水したのは都落ちの二か月後だ。妻の送り出した髪が清経の許に届くまでに要した時間を差し引くと、離別の後一か月そこそこで、妻は清経からの音信のないことに恨みを抱いたことになる。八百年前にも、せっかちでこらえ性のない人はいただろうが、これはどう考えても早すぎよう。

要するに、清経の入水の理由を妻の心変わりの故だとする延慶本の説明は、一面からするとわかりやすいけれども、実態からはかけ離れているといわざるをえない。

5

心変わりの時期が早すぎて、延慶本の説明を不自然だと感じた

のは、わたしだけではない。『源平盛衰記』の作者もそうだ。

『盛衰記』も、清経の入水の理由を妻の心変わりだとしている。ただし、この点は延慶本と同じなのだが、心変わりの時期を離別の三年後だとしていて、一か月そこそこだとする延慶本とは大きく違っている。

折に触れて手紙を出すとの約束を信じて三年間待った妻は、待ちくたびれて清経の心変わりを疑い、これ以上待っても無駄だと判断して髪を送り返したのだという。

三年間も使りがなかったのなら、心変わりを疑うよりも前に、まず生死の心配をしそうなものだが、それは置いておこう。生きていることが前提だとすれば、恨みを抱いてとうぜんだ。三年間は、待つ身にはつらい。恨みの醸成期間としては、妥当なところだろう。

音信を待った期間を三年間とすることで、『盛衰記』は延慶本の不自然さを解消しえた。

とはいえ、これで一件落着というわけにはいかない。三年間は、妻の心変わりの醸成期間としては妥当なのだが、現実にはあり得ない歳月なのだ。

清経夫妻の離別は、寿永二年(1183)七月のことだ。足かけ三年後の元暦二年(1185)三月には、平家自体が壇浦で滅亡してしまっている。清経の入水どころではない。

どうやら『盛衰記』は、木を見て森を見なかったようだ。期間

の辻褃合わせに心奪われて、肝心な時間経過への配慮をぬかってしまった。致命的な欠陥だ。清経入水の契機を説明する記事としては意味をなしていない。

6

『平家物語』の清経の入水に関する記事は、他の諸本も大同小異だ。一門の将来への絶望を要因だとする覚一本型と、妻の心変わりを要因だとする延慶本型とに大別される。心変わりの時期の異なる『盛衰記』も、この中に含まれる。なお、謡曲『清経』は後者の系統を引いている。

しかし、見てきたように、諸本の掲げる清経入水の要因は、いずれも納得のいく説明になっていない。

ここで、わたしの推理をしたい願望が頭をもたげる。

清経はなぜ入水したのか。

そのことにふれる前に、やはり、手順として先行の諸説に耳を傾けなければなるまい。

先行の諸説は詰まるところ、時子腹の面々と小松家との確執のあたりを受けたものだとするところにある。一門の命運への絶望や妻の心変わりへの絶望だとする『平家物語』の説明は、さすがに顧みられていない。

たとえば『平家物語全註釈』（富倉徳次郎 角川書店 1976）は、「同じ平氏一門といっても、宗盛・徳子のような八条二位を

母とする人々と、小松殿の系統の三兄弟との間は、何かとしっかりいかないと思えるので、こうした太宰府落ちで、その一人、清経がまず入水するというようなかなしいことが起こったのである」としている。

またたとえば、『平家物語研究事典』（市古貞次編 明治書院 1988）は、「彼の兄維盛もやがて熊野沖で入水するのであり、小松家の公達の微妙な立場を示している」（『清経』の項 池上洵一執筆）としている。

清経の入水に時子腹の面々と小松家との確執の影を見ることに、わたしも同意する。

ただ、「何かとじっくりいかない」とか、「微妙な立場」とかいった隠微なものではなくて、両者の間にはささくれ立った、ぎすぎすした関係があったのではないか。もっとはっきりいえば、時子腹の面々によるいじめだ。それが清経を入水に追い込んだのではないのか。

明証があるわけではない。あくまでもこれは、状況証拠による推理だ。

7

清経の問題は、清経だけ見ていたのでは埒があかない。

さいわいなことに、というのも変だが、清経には同じように入水した兄維盛がいる。また、一門から離脱した弟忠房がいる。

清経だけではなく、兄と弟もまた、同じように一門からはみ出してゐるのである。そのこと自体、すでに尋常ではない。じじつ、彼等の事例を重ね合わせると、これは偶然ではなく、根の所でしっかり結びついた必然の現象だと察せられる。

同じ一門からの離脱でも、頼盛の場合とは違ふ。頼盛は頼朝からの働きかけを受けて、つまり外部からの誘いに乗って飛び出したのだが、小松家の三兄弟の場合は、内圧によってはじき出されたとみられるのだ。

三兄弟の入水、あるいは一門からの離脱の契機を、時子腹側から加えられたいじめではないかと判断する理由は二つある。

第一は時期だ。いずれも平家一門の緊張が極度に高まった時に起きている。それも、追い詰められた緊張感である。この共通点は無視できない。

第二は、成親家との関係だ。三人は、ともに藤原成親家と深く結びついていて、時子腹の側から攻撃の標的にされる条件を備えている。

なお、維盛には、この二つの理由の外に、二度にわたる敗戦の責任が加わる。

*

繰り返してふれたように、清経が入水したのは、太宰府を追われて先行きの見通しが立たない上に、敵の襲撃に怯える切迫した状況の中でのことであつた。前方には源氏がいる。後方には緒方

維義がいる。まさに「前門の虎、後門の狼」である。

あくまでもひとつの可能性ではあるけれど、緊張を強いられ、居ても立ってもいられない苛立ちの中では、一門をこのような苦境に陥れた「犯人捜し」が始まってもおかしくない。時子腹の側にしてみれば、手近な弱者を見つけて痛めつけるほかに、気持ちの収めようがなかっただろう。この場合、理由の正統性は問題にならない。とりあえず、なんらかの口実があれば十分だ。いわゆる、言いがかりである。

抑圧された集団のエネルギーは、結束して外敵と対峙する方向に向かわず、しばしば集団内部の弱者に向かって放出される。現代ではよく知られた現象だ。鬱屈した思いは、はげ口を見つけると一気にはとばしる。はずみのついた共同幻想に抑止力は効かない。弱者をいたぶっている間、彼等は現実を忘れて、つかの間の勝者でいられる。

*

維盛が石童丸等とひそかに一門を離脱したのは、一の谷合戦で敗北した平家が、屋島に逃げ帰って一か月余り後のことだつた。

一の谷合戦では、平家の公達が多数戦死したり、生捕りになつたりした。傷ついた人々は、戦死者の何倍にもなるだろう。それだけではない。地獄さながらの阿鼻叫喚のさまを、非戦闘要員の女性たちも初めて目の辺りにした。強烈な刺激だつたはずだ。命からがら逃げ帰つた屋島では、脳裏に深く刻み込まれた悲惨な情

景や、消し去ることのできない恐怖心が、人々の心の中で渦巻いていたに違いない。

やり場のない憤懣のはけ口を求めて、人々は血眼になる。そうした状況中で、維盛は屋島を抜け出したのだ。

維盛の入水に関しては、彼の補陀落信仰を指摘する説がある。

また、清盛の悪心をやわらげるために命を捧げると熊野権現に願を掛けた父重盛と重ね合わせて、小松家は死に急ぐ家系だとする論もある。

補陀落信仰も死に急ぎ説も、後付の理由にすぎず、入水原因の解明にはなっていない。

維盛の内なる要因については、ここではふれない。ただ、どのような思いを内に秘めていたとしても、外からの刺戟がなければ発現しなかったことを、ここでは指摘しておきたい。大前提は、屋島にいられなくなった現実なのだ。すべてはそれに触発されたものであることを、見逃してはなるまい。ひたすらなる信仰の実現だけが目的の離脱・入水なら、決行は一の谷合戦の前でもよかった。

清経と違って、維盛には非難に耐える覚悟が出来ていた。清経の入水前後にも、太宰府から屋島に着いた当座にも、彼への風圧はそうとうなものだっただろう。だが、彼は堪えた。しかし、ついに堪えきれなくなった。一の谷合戦の悲惨さが、それまでの非難に数倍する圧力となって彼に襲いかかったのだ。

維盛が一の谷合戦の後に離脱した理由については、こう考えるほかないのではないか。

いずれにしても、時期の問題を抜きにして、彼の離脱・入水を語ることは出来まい。

*

忠房が屋島から姿を消したのは、義経による奇襲攻撃を受けて一門が大混乱に陥っている最中だったという。

この度の戦いにも勝ち目はない。連戦連敗の平家にそのまま残留しても、なんの展望も開けないことははっきりしている。それに、兄二人がすでに脱落していたことでもあり、今まで以上に居心地が悪くなることも目に見えている。非生産的な「犯人捜し」に明け暮れる一門の中に居続けて、中傷誹謗や怨嗟にひたすら堪えるよりも、湯浅氏の庇護を受け、場合によってはその力を借りて現状打開を図り、同じ事なら源氏に一矢報いて死にたい、と彼が考えたとしても不思議はない。

8

小松家と成親家との関係は濃い。重盛、維盛の父子二代にわたって婚姻関係が結ばれている。

重盛は成親の妹と結婚している。「尊卑分脈」によれば清経と忠房は、成親の妹を母とする同腹の兄弟である。長男維盛の母は別の女性だが、彼の妻は成親の娘であった。

成親は、いうまでもなく、平家政権の打倒をはかった鹿谷事件の首謀者とされる人物だ。

鹿谷事件は、思わぬ所からほころびが出て関係者が逮捕され、成親は備前に流されて処刑された。事件そのものは、未然に計画が発覚したために、平家に実害はなかった。むしろ、対抗勢力を排除することができて、平家にとっては好都合だったという面もある。

しかし、結果はともあれ、清経等三兄弟は平家政権打倒を図った成親家とつながっている。それが現在の苦境の直接の原因ではないけれど、そんなことはどうでもよい。窮地に陥った平家の、「犯人捜し」の口実には十分なりうるし、彼等が攻撃の標的にされた可能性は非常に高いと見なければなるまい。

そうした中で、清経が最初に挫折したのは、「何事も思ひいれたる」その気質によるのだろう。打たれ強い者よりも、いじめ甲斐のある方が加虐感を満足させるという面もある。

ここでひとつ確認しておきたい。小松家のすべて、あるいは成親家につながる者すべてが時子腹の側に虐げられ、うちひしがれていたのではない点だ。清経の兄資盛、弟の有盛、従兄弟の行盛等は、最後まで時子腹の面々と行動をとともにし、壇浦で戦って果てた。寛一本によれば、資盛等三人は戦った末に、手を取り組んで海に身を投じたという。

小松家は、一門からの離脱組と一門への忠誠組とに二極分化し

ているのである。ことに、清経の同腹とされる有盛が離脱せず、一門に残留していることに留意したい。

彼等とて、辛い思いをしたことは一再ならずあっただろう。だが、彼等はおそらく、身をすくめて風圧を避ける処世術を身につけ、生きるためには冷たい視線にも堪え、時子腹の連中に擦り寄るのもやむを得ないと割り切ることが出来たのだろう。

推測の上に推測を重ねることになるけれども、清経が時子腹の連中にいたぶられているとき、忠誠組はどのような態度をとったのだろうか。もしもこの時、彼等が時子腹の面々と歩調を合わせたいじめのお先棒を担いだとすればどうだろう。

清経をスケープゴートにするのである。そうしなければ、自分たちの身に危険が迫ると感じて、加害者側に加わるのはあり得ないことではあるまい。壇浦合戦で、資盛等が手を取り組んで海に身を投じたのは、彼等が一門の中で共通の地平に立つ、浮いた存在だったことを示している。と同時に、思いなしに、心のどこかに痛みを感じていたことの表れのようにも、わたしには思われる。

清経にしてみれば、防波堤になったり慰めたりしてくれるところか、心許せるはずの兄弟たちも、手の届かない向こう側に行ってしまったとなると、絶望的だ。救いはない。

清経が入水におよんだ背景には、あるいはこうした事情があったのではないか。そしてそれが、『平家物語』の作者には見えて

いないのではないか。

9

深読みだ。空想だ、という声が聞こえてきそうである。

そうかも知れない。否定はしない。

だが、ここではあえて、『平家物語』の作者には見えていなかった、あるいは、見ようとしなかった、と思われる事例を二例あげておきたい。

たとえば覚一本は、壇浦合戦を前にして阿波民部重能が変節したことを、源氏側に身柄が拘束されている息子田内左衛門を助けるために、「たちまちに心がはり」したのだと説明している。諸本もほぼ同じ扱いだ。

しかし、これは違うだろう。阿波民部重能にとって息子を助けることは、目的ではなくて、返忠の口実、あるいは自分自身への言い訳にすぎまい。屋島から壇浦に向かう途次、つまり、勢力圏である四国東部から遠ざかるにしたがって、彼の気持ちには徐々に変化が生じ、平家への忠誠心が薄らいでいったのだが、「二心あるをもって恥とす」との武士の倫理観に阻まれて、なかなか返忠の決断がつかず、決戦の直前になってようやく、自分には息子を助けるという口実があることに思い至った、というのが真相ではないか。

阿波民部重能の心はおそらく、かなり早い時期に平家から離れ

ていた。それに気付かず、「たちまちに心がはり」したと驚いたのは、平家一門と『平家物語』の作者だけだろう。

*

同様に、清経の弟宗実の自死についても、真相はどうやら、『平家物語』の作者には見えていないようだ。

宗実は三歳の時、左大臣藤原経宗家に養子に入り、十八歳まで平家とは無縁の生活をしてきた。だが、平家滅亡後、源氏が平家の末裔の探索をしていると知って経宗家を離れ、大仏聖重源の許に身を寄せた。経宗家に迷惑がかかるのを避けようとしたのだろう。

この宗実に、鎌倉から呼び出しが掛かった。処刑を予測した宗実は、自ら命を絶つことを決意して飲食を断ち、鎌倉への道の半ば、足柄山を越えたところで息絶えたという。

『平家物語』によれば、宗実が処刑を予測したのには、理由があった。湯浅氏の許に潜んでいた兄忠房が捕らえられ、鎌倉に呼び出されて処刑されていたし、宗実が呼び出される直前には、姿をくらましていた従兄弟の知忠が京で誅されていたからだ。

『平家物語』はこのように、宗実の鎌倉への呼び出しと自死とを、平家断絶を図った頼朝の施策の一環であり、彼はその犠牲になったのだと位置付けている。呼び出されるまでの経緯に、たとえば覚一本と延慶本では違いがあるのだが、これは当面の問題には影響しない。

さて、過去の事例やタイミングから、宗実が自身の処刑を予想するのはわかる。悲観的に事態を認識したとしても、それはやむをえない。

しかし、『平家物語』が宗実の事例を忠房や知忠のそれと重ね合わせて、宗実の主観的な直感を追認し、保証する立場をとっているのは納得できない。

忠房や知忠は、源氏の追求を逃れて潜んでいた人物だ。それに對して宗実も、頼朝が信を置く俊乗房重源が身元引受人となつている人物だ。頼朝は大仏再建で接触のあつた重源を信頼し、宗実の身柄を彼に預けている。宗実の存在を知つた上で処刑を猶予したばかりか、出家も認めているのだ。彼我の身の上には、決定的な違いがある。

『平家物語』はこの落差に気付いていないのか、あるいは気付いても無視したのか、いずれにしても、この落差にふれないことによつて、無辜の宗実さえも死に追いやつたと、頼朝による平家の残党狩りの熾烈さと徹底ぶりを強調する方向をたどっている。

思うに、宗実の事例を重ね合わせるべき人物は、忠房や知忠ではなくて、甥の六代だろう。維盛の子六代も、宗実の場合と同じように、頼朝の信の厚い文覚が身元引受人となつている。そして、彼も処刑が猶予され、出家が認められている。平家滅亡後の二人の環境は、瓜二つだ。

六代と宗実とを重ね合わせると、『平家物語』の伝えるところ

とは違つた構図が浮かび上がってくる。宗実の自死は、じつは、彼の思い込みによる無駄死であつた可能性が高いとみられるのだ。

『吾妻鏡』によれば、六代は建久五年(一一九四)六月に鎌倉に呼び出され、頼朝と面談している。宗実の呼び出される前のことだ。頼朝はいたくご機嫌だつたようで、しかるべき寺の別当職に就任するようにとりはからうことを提案したという。

となると、宗実の場合も、同じように考えてよいのではないか。面構えを窺見したうえで、毒の有無を確かめる。その結果が処刑となる可能性はゼロではないが、方向はむしろ逆で、暫定的に認めている処刑の猶予を恒久化するなど、相応の処遇をしようとしたのではないか。

少なくとも、宗実への呼び出しは、処刑を目的としたものだったとは考えられない。なぜなら、彼が呼び出された時、六代は呼び出されていないからだ。処刑するための、つまり、平家断絶をはかつた出頭命令なら、宗実と同時に、とうぜん六代も呼び出すはずだろう。幼時から他家に養子に出されて平家と無縁で育つた宗実よりも、小松家の嫡々である六代の方が、はるかに危険度は高い。にもかかわらず、この時六代は呼び出されていない。この一点で、処刑の線は消える。

六代も、後に処刑された。平家滅亡後十三年、頼朝の没する前年だ。六代の処刑が頼朝の指示によるものであつたとしても、そ

れは消去法による最後の選択だったのでないか。

頼朝は、都落ちに同行しなかった頼盛を厚遇している。官位を、本位の大納言に復ただけでなく、いったん没収した所領も返還している。

要するに頼朝は、平治の乱後に助命に動いてくれた池禪尼と重盛に恩義を感じ、今は亡き彼等への恩返しを、その子や孫たちにしようにしているのだ。一般論としては厳しい平家断絶政策を推進する一方で、池禪尼と重盛の末裔には寛大な措置をとるのが、最晩年までの頼朝の流儀だった。

その頼朝が、六代よりも先に宗実の処刑を図ったとは考えにくい。

頼朝に処刑の意思がなかったとすれば、宗実の自死は、状況判断を誤まって決断を急いだ独り相撲だったと解するほかない。

*

『平家物語』の、とりわけ覚一本には構想優先の意識が強くはたらいいて、例外の領域にも原則を適用し、それで律しようとする傾向がある。見えるはずのものが見えなかったのは、おそらくそのためだ。宗実の場合も清経の場合も、根は同じだと見てよいだろう。